

## この本の見かた

日本の古典文学作品の中から選んだヒーロー、ヒロインと、その物語を、見開き2ページで紹介していきます。

**● ヒーロー、ヒロイン**  
物語の登場人物のひとりりをヒーロー、ヒロインとして選び、古典の作品世界へとナビゲートします。

**● ジャンル**  
古典文学のなかの作品のジャンルを示しています。ヒロインは赤色の巻物、ヒーローは緑色の巻物です。

**● タイトル**  
作品名と、取りあげたヒーロー、ヒロイン名がわかります。

**● マーク**  
ヒロインは赤色ののみじ、ヒーローは緑色ののみじで示しています。

**● 人物紹介**  
ヒーロー、ヒロインの境遇や性格の特長などを簡単に紹介します。

**● プロフィール**  
ヒーロー、ヒロインの家族や友人、くらしぶり、物語の舞台などの情報を紹介します。

**● あらすじ**  
作品のあらすじを簡潔に伝えます。

**● 注**  
むずかしいことばの意味や内容をわかりやすく説明し、作品についての情報なども伝えます。

**● 登場人物**  
ヒーロー、ヒロインとかわり、物語をいづるおもな登場人物を紹介します。

**● コラム**  
古典作品をより楽しむための豆知識を紹介します。

**● 名場面**  
物語のなかの名場面を紹介。ヒーロー、ヒロインの身に起こったできごとから、さらにどんな物語が展開していくのでしょうか？ここでは、原文の一節も紹介し、現代語訳をつけています。

ヒーロー&ヒロインに会おう!

# 古典を楽しむ きっかけ大図鑑

監修◎齋藤 孝

第1巻 神話から物語へ—奈良・平安時代



日本図書センター

## 古典の登場人物になってみよう

古典はわたしたち日本人が大切に受け継いできた宝ものです。古典を読めば、昔の日本人の心がわかります。日本の歴史と文化が古典にはつまっています。自分の国の歴史と文化を語れることが、国際人の条件です。世界がインターネットでつながった現代を生きる君たちにとって、古典になじんでおくことは大きな財産になります。

古典を楽しむのにいちばんいいのは、登場人物になってみることに。神話の神になったり、姫になったり、武士になったり。自分がヒーロー、ヒロインになった気分を読めば、古典はわかりやすくなる。この本は、ヒーロー、ヒロインの気持ちになりやすいように工夫しています。

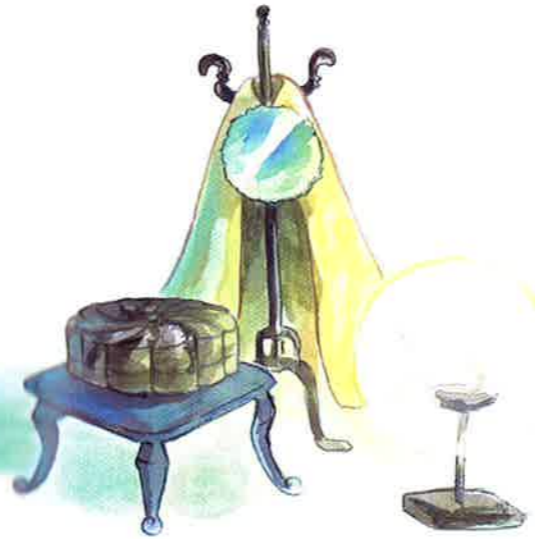
イラストと説明で人物のイメージをつくって、あらすじを読む。そしてクライマックス・シーンを楽しむ。原文（昔の言葉）のところは音読してみてください。見開きでパッと古典のおもしろさがわかるようになっていきます。

まずパラパラとページをめくって、自分の心がひかれたヒーロー、ヒロインのページを読んでみてください。「昔の人も今の人たちと変わらないんだなあ」と思ったり、「昔の人の感覚は今とはちょっと違うなあ」と感じたら、もう古典の世界に入っています。

『源氏物語』や『平家物語』のような物語から、能、歌舞伎、狂言、浄瑠璃、落語など、いろいろな作品を取りあげています。入り口はたくさんあります。この本をきっかけにして、古典の森に入ってください。一生の宝になる古典との出会いの場、それがこの本です。

さいとう たかし  
齋藤 孝 (明治大学文学部教授)

## もくじ



### 本書について

- \* 本書に掲載するイラストは、原作を参考にし、イラストレーターがそれぞれイメージし、新たに描いたものです。
- \* 作品のタイトルや登場人物の名前、古典原文とその現代語訳は、原則として巻末に掲載の典拠資料を参考にしています。
- \* 原則として、すべての漢字にルビをふり、現代かなづかい、現代送りかなを使用しています。

監修者のことば	2
伊耶那岐命 <small>いざなぎのみこと</small> 『古事記』①「黄泉国」	4
イラスト：つだなおこ	
天照大御神 <small>あまてらすおおみかみ</small> 『古事記』②「天の石屋」	6
イラスト：石川あぐり	
大国主神 <small>おおくにぬしのかみ</small> 『古事記』③「国づくり」	8
イラスト：佐川明白香	
八束水臣津野の命 <small>やつかみずおみずのみこと</small> 『出雲国風土記』「国引き」	10
イラスト：かしゅう	
聖徳太子 <small>しょうとくたいし</small> 『日本霊異記』「聖徳太子の不思議な言動の話」	12
イラスト：岩田健太郎	
かぐや姫 <small>かぐやひめ</small> 『竹取物語』	14
イラスト：白田まな	
男（在原業平） <small>おとこ ありわらのなりひら</small> 『伊勢物語』	16
イラスト：西野由希恵	
落窪の君 <small>おちくぼ きみ</small> 『落窪物語』	18
イラスト：佐川明白香	
光源氏 <small>ひかるげんじ</small> 『源氏物語』① 巻2「帚木」	20
イラスト：石川あぐり	
紫の上 <small>むらさき うえ</small> 『源氏物語』② 巻5「若紫」	22
イラスト：つだなおこ	
朧月夜の君 <small>おぼろづきよ きみ</small> 『源氏物語』③ 巻8「花宴」	24
イラスト：橋本京子	
明石の君 <small>あかし きみ</small> 『源氏物語』④ 巻14「滞標」	26
イラスト：さいとうかこみ	
中将 <small>ちゅうじょう</small> 『堤中納言物語』①「花桜折る少将」	28
イラスト：かしゅう	
男 <small>おとこ</small> 『堤中納言物語』②「はいずみ」	30
イラスト：白田まな	
中納言 <small>ちゅうなごん</small> 『とりかへばや物語』	32
イラスト：佐川明白香	
藤原道長 <small>ふじわらのみちなが</small> 『大鏡』「太政大臣道長」	34
イラスト：中野耕一	
禅智内供 <small>ぜんちないく</small> 『今昔物語集』①「池尾の禅智内供の鼻のこと」	36
イラスト：いずみ朔庵	
盗人 <small>ぬすびと</small> 『今昔物語集』②「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人のこと」	38
イラスト：内山大助	
奈良・平安時代（上代・中古）古典文学年表	40
古典を楽しむ三知識	42
古典をもっと知りたい読書案内	44
さくいん	46
典拠資料一覧	47

# 伊耶那岐命



あらすじ

地上におりた伊耶那岐命と伊耶那美命は結婚します。そして国土の島々や、山川草木などとなる神々を生みますが、最後に火の神を生んだために、妻の伊耶那美命は火傷をして死んでしまいます。これをかなしんだ夫の伊耶那岐命は、出雲国（島根県）と伯耆国（鳥取県）との境にある比婆之山に伊耶那美命を葬ります。

やがて、伊耶那岐命は妻の伊耶那美命に会いたいと思い、黄泉国へと追っていきます。御殿からあらわれた伊耶那美命に、伊耶那岐命は、まだ国をつくり終えていないので、帰ってきてほしいと言います。伊耶那美命は、黄泉神と相談するので、そのあいだ、自分を見ないようにと言って御殿に帰ります。しかし、長く待たされた伊耶那岐命は、御殿の中に入って伊耶那美命の変わり姿を見てしまいます。

妻の姿を恐れ、伊耶那岐命は黄泉国から逃げ帰りますが、伊耶那美命は追いかけてきます。これを防ぐために、伊耶那岐命は黄泉国との通路を巨岩でふさぎます。

## わたしは、伊耶那岐命

まだ天地の形がなかったころ、地上の世界におりて伊耶那美命と夫婦となり、国土の島や山川草木となる神々の生みの親となります。伊耶那美命が死んでしまうと、かなしみのあまりに伊耶那美命を追って黄泉国（死後の世界）へ行きます。これがきっかけで、死の世界と生の世界は、現在のように分かれることになりました。

## プロフィール

- ❖ 出生：「神世七代」と呼ばれる神々のうちの1神。伊耶那岐命は、「誘い合う男神」という意味。
- ❖ 結婚：地上におりて、同じ「神世七代」の1神である伊耶那美命と夫婦となる。
- ❖ 使命：天の神々から伊耶那美命といっしょに、「この漂っている国土をあるべき姿に整え固めよ」との命を受ける。
- ❖ 最初におりたところ：伊耶那美命とともに天の浮橋に立ち、沼矛（玉飾りを施した矛）をさしおろし、潮をカラカラとかき鳴らして、引き上げたときに矛の先からしたたる潮が積もってきた淤能碁呂島。
- ❖ かなしみ：妻の伊耶那美命が火の神を生んで死んでしまったこと。



## 伊耶那美命

伊耶那岐命のつぎに生まれた神。地上におりて伊耶那岐命と夫婦となる。国をつくらうとするが、火の神を生むさいに死んでしまい、国づくりは中断。黄泉国から伊耶那岐命を追ったことで、黄泉津大神、道敷大神とも名づけられる。

是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、其の妹伊耶那美命の言はく、「吾に辱を見しめつ」といひて、即ち予母都志許売を遣して、追はしめき。

伊耶那岐命に変わり姿を見られた伊耶那美命は、恥をかかされたと怒って、すぐに黄泉国の醜女に追いかけてさせます。伊耶那岐命は逃げのびようとしますが、伊耶那美命は雷神たちにも追わせません。黄泉国の坂のふもとまで逃げた伊耶那岐命は、そこに生えていた桃の実を3個取って迎え撃ち、みんなを追い返します。

最後には、妻の伊耶那美命が追ってきたので、巨岩で防ごうとすると、伊耶那美命は「あなたの住む国の人間を1日に1,000人殺しましょう」と言い、伊耶那岐命は「1日に1,500の産屋を建てよう」と答えます。【訳】そこで、伊耶那岐命はその姿を見て恐れ黄泉国から逃げ帰るときに、妻の伊耶那美命は、「よくも私に恥をかかせましたね」と言い、ただちに黄泉国の醜女を遣わして、そのあとを追いかけてさせた。



伊耶那岐命

醜女

黄泉国へ行った伊耶那岐命が、伊耶那美命から逃げようとしたとき、伊耶那美命に追っ手として遣わされる。伊耶那岐命が捨てた髪飾りから生えて実つた山ぶどうの実や竹の子を食べるうちに、伊耶那岐命に逃げられてしまう。

伊耶那美命

## コラム 『古事記』について

奈良時代のはじめ（8世紀）に書かれた、現存されている。また、中・下巻では、神武天皇から第33代推古天皇までの歴代天皇や、それぞれの時代に起きたことが記されている。中巻に登場する天皇たちが実在したかはまだ確認されていないが、下巻では実在が確認できる天皇たちの物語が中心となっている。神話、伝説、歴史が区別されることなく、一体となっているところが大きな特徴である。



伊耶那岐命と伊耶那美命の結婚

※1 神世七代、天地が初めてあらわれ動きはじめたときに誕生した3神、地上世界がまだクラゲのようにふわふわしたときに誕生した2神のつぎに誕生した七代神の総称。

※2 このことによって、死の世界（黄泉国）と生の世界（葦原中国）は分離され、この世では1日に必ず1,000人が死んで、1,500人が生まれるとされる。